



楷

第七十二号

岡山大学
 附属図書館報
 OKAYAMA UNIVERSITY
 LIBRARY BULLETIN

KAI
 NO.72
 2021
 FEBRUARY

<写真>

田ほうづき

畑ノ中ニ生ス實全ク酸醬ニ似
 テ小ナリ野酸醬ト同物異名

「備前国備中国之内領内産物絵図帳」（岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫より）

— 目 次 —

- 厳しい局面も見方を変えれば
 （鹿田分館長 鶴殿平一郎） p.2
- 池田家文庫絵図展「岡山・大坂と海の道」を通じて
 （社会文化科学研究科 東野将伸） p.5
- ネーミングライツ事業報告 p.9
 ～ネーミングライツの導入について～
- マスカット p.10
 池田家文庫絵図展報告、ブックハンティング実施報告 ほか
- 会議・研修・編集委員から p.12

厳しい局面も見方を変えれば

鵜殿平一郎

はじめに

私が大学院生として図書館に入り浸ったのはもうかれこれ30年ほど前になります。まだ、インターネットの無かった時代です。ワクワクとした未知の世界への扉を開く場所が図書館でした。重厚な蔵書群に圧倒され、また美しい表紙の海外雑誌を読み耽り、しばし実験の疲れを癒すことができました。しかし、今や図書館はその様な空間ではありません。蔵書の所蔵庫、学生の勉強する場所としてのイメージが定着していますが、同時に電子ジャーナルや各種のサーチエンジンを駆使したサイバー空間の統括を担う様になりました。昨今の電子ジャーナル契約価格の高騰が大きな問題を突きつけています。SARS-CoV-2に翻弄された2020年、変革を迫られる図書館のあり方など、諸所難しい問題が各方面で議論されています。私は図書館運営のことはよくわかりませんし、何を書いたら良いものかと思案いたしました。できることは、肩の力を抜いて一歩下がって現実を受け入れてみることでした。本来は生命科学の研究者でありますので、一研究者として今の時代に対する雑感を述べてみることに致します。

図書館利用者が減った？

2010年度と2019年度における鹿田分館の利用状況（週に一度以上利用すると答えた割合、母集団は学部学生532名、大学院生57名）は、医学科（60→19%）、保健学科（37→31%）、歯学科（33→21%）で、利用頻度は明らかに減少しています。利用時間帯は、日中が多く授業終了後に利用している様です。鹿田分館は2014年度にリニューアルオープンし、カフェ（ONSAYA）を併設したゆとりある空間へと変わりました。カフェにはお客がいるものの、分館利用頻度の増加には繋がっていない様です。施設・設備に対する要望では、一人用机（62.1%）が最も多く、一人静かに勉強する空間を望んでいます。利用しないと答えた理由では、必要な情報はインターネットで入手する（50%）、図書館に行く時間がない（19.9%）、という答えが高い比率を占めていました。仮にプライバシーがある程度確保された電源付属の一人用机を増やすことができれば、利用者は格段に増える様な気が致します。現代は図書ではなく一人一台のノートパソコンでネットを介して情報を収集し、レポートなどを作成します。しかし、学部学生、大学院生、若手教員の多くはその様な居場所を持ちません。羽田空港のVIP用ラウンジではその様な机がずらりと並んでいます。私はフライト時刻の2時間前にはそこに辿り着き、提出原稿を書き、メールのやり取りや論文投稿までもよく行っていました。日頃と違う雰囲気作業効率も上がりました。羽田空港は正に仕事場だったのです。その様な空間が図書館があれば、個人的には一つ利用してみようかなと思います。

新幹線でも電源のあるグリーン席に座れば、仕事がやり易く感じるのと同じ理屈かもしれません。

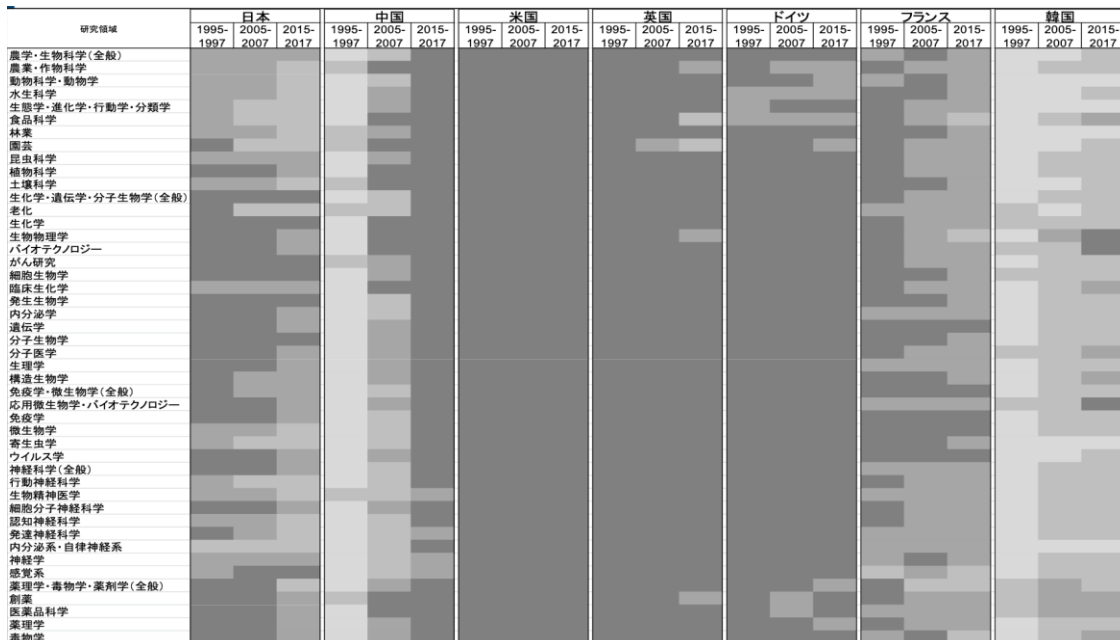
購読電子ジャーナル数の減少が、研究力低下に繋がる？

生命科学研究者にとって電子ジャーナルは重要な生命線です。読めなければ研究力は低下することは予想されますが、逆に豊富な電子ジャーナル数があれば必ず研究力が上がるのでしょうか。必ずしもそうとは言いきれませんが、岡山大学の電子ジャーナル等合同会議資料によれば、ある程度の相関関係にある様に見えます。この場合の研究力とは、US News 世界大学ランキングを指しており、この指標は13個の評価項目からなり、そのうちTop10%論文数（12.5%）、Top10%論文割合（10%）、総論文数（10%）、総被引用数（7.5%）、相対的被引用数（10%）だけで50%の評価項目を占めています。数もさる事ながら、どれだけ影響力を持ったか（引用されたか）、が重要になります。研究領域ごとのTop10%論文数国際シェア順位の変化（生命科学研究領域）（図1）によれ

ば、本邦は多くの領域で影響力を失いつつあるといえます。この様な数字が、国立大学大学院改革を声高に叫ぶ原因の一つになっているのでしょうか。ここで、日本人の研究力は本当に低下しているのか、よく吟味する必要があります。高 impact factor(IF)雑誌に掲載された論文であれば、その被引用回数は高くなるのは道理です。では、高 IF 雑誌に掲載される論文を書くためにはどうしたら良いのでしょうか。高 IF 雑誌は殆ど例外なくエディターキックにより査読に回らない制度を作っています。査読 (in-depth review) に回れば、accept の可能性が出てきますが、たとえ reject になってもコメントをいただけるので、さらなる改訂に臨むことが可能になり、結果的に良い論文として仕上がってきます。査読に回るためには、Abstract と Introduction が非常に重要です。また、よく言われるのは投稿する前に Native English Speaker に見てもらいなさいということですが、これは英文修正とは異なります。その分野のことがわかる科学者に見てもらいなさい、ということ。もしその様な方が周囲にいなければ、高額 (20 万円超/article) になります。業者の査読制度を利用する手があります。英文修正に留まらず、論文構成など一歩も二歩も踏み込んだ指摘がもらえます。コメントに従い全て改訂することができれば、同じデータであっても査読に回る確率は間違いなく高くなり、高 IF 論文をゲットできる可能性が大きくなります。お金はそれなりにかかりますが、短期間で大学ランキングを上昇させる一つのテクニックです。ただし、サイエンスのレベルが低ければもちろん通用しないことは明白です。いずれにしても日本人脳と Native English Speaker のそれとは思考様式と感性が随分と異なることを理解することは重要です。研究力はあるのに、論文構成力が乏しいために一流誌の査読に回らず、その結果、二流誌以下に甘んじているとすれば、それは本当の研究力を反映したものとは言えませんので、一度は真剣に考えてみる必要があると思います。

1-5位
6-10位
11-20位
20位より下

研究領域ごとのTop10%論文数国際シェア順位の変化 (生命科学研究領域)



出典: SCOPUS (1981-2017) (Elsevier社)のデータを用いてJSTが作成

図1

購読電子ジャーナル数の減少が止まりません。購読原価上昇率（年 6%）、効率化係数相当額減額（1.6%減）、消費税増税による不足分は研究科選定枠の予算で賄いますので、このままの予算規模で推移しますと医歯薬総合研究科選定の電子ジャーナル数は、2023 年度をもってゼロになります。これは Nature Immunology, Nature Cell Biology などの Nature 系姉妹誌、Cancer Research, Clinical Cancer Research, Blood など購読できなくなる事を意味します。予算配分を大学執行部に打診しても、無い袖は振れない、或いは、部局運営費を代わりに削減するという話になり、中々に妥協点が見出せません。行き着く先は、オープン・アクセスジャーナルへの完全移行（一部 pay per view を併用）になることが予想されますが、高額な article processing charge (APC)を研究者個人が負担することになりますので、結局は科研費を持っておらねばならず、研究者個人の問題に帰属されます。しかしながら、このことは多くの教員もあまり自覚していない様に思います。一方で、30 年前は各分野で、しかも教授、助教授、講師の先生が個人購読を分担して行い、これを大学院生はコピーして読む、それでも自教室に読みたい論文が無い場合は、どの教室にいけばあるのかを探し出し、そこに行ってコピーさせてもらうということで、皆で力を合わせてやっていた時代がありました。その時代は一個の論文は今よりも貴重で、確かに不便は多々ありましたが、我が国の研究力は間違いなく上昇気流に乗っていたのです。また、reference に引用する全ての論文を全部隅から隅まで読む必要もありません。本当に大事なものは数編であり、残りは abstract だけでも十分なものも多々あります。便利さに飼われ慣らされた私たちは、もう後戻りはできないでしょう。しかし、もしかするとあの時代に逆戻りする可能性を覚悟しておく必要もあると思います。

行き詰まったら原点を思い出す

研究者は、電子ジャーナルが読めなくなることに危機感を抱いているのは確かです。でもある日、突然に論文が読めないから研究ができない、と思いたくなる日が来るかもしれません。その時には逆上するよりも、研究の喜びを純粋に噛み締めていた遠い昔の自分を思い出したら良いかもしれません。どうして自分は研究をやりたかったのか、研究の本当の喜びとは何だったのか。駆け出しの研究者は、その様なことを自問する良い契機となるかもしれません。原点を思い起こすことができれば不要な感情は消え失せ、本当に大事なことだけが見えてきます。そうなれば状況はどうであれ、再び進むべき正しい道や、様々な方策も見えてきます。これは、他の厳しい局面に遭遇した際にも当てはまる事でしょう。

おわりに

思いつくままに勝手気儘に書き綴りました。我が国の研究力低下は、確かに大きな問題であり危惧するものではありませんが、まもなく復活すると私は信じています。元々、人的資源に優れた国でありますので、限界ばかりに目が向く、ある種の擦込まれた思い込みを無くすことができれば、自ずと頭角を現してくるはずで、いつの時代も常に先頭を走り続けることは現実的ではありません。SARS-CoV-2 など厳しい時代ではありますが、今は一休みしながら来るべき時期を見据えて力を蓄えておくべき時代であろうと思う次第です。

（うどの・へい 鹿田分館長）

池田家文庫絵図展 「岡山・大坂と海の道」を通じて

東野将伸

1 令和2年(2020)度 池田家文庫絵図展の準備

本稿では、令和2年度池田家文庫絵図展の内容や準備過程を紹介するとともに、同展示を通じて筆者が感じたこと、考えたことを記していく。

池田家文庫は、江戸時代のほとんどの時期において備前国全域と備中国の一部を治めた岡山藩(藩主:池田家)の藩政文書であり、岡山大学附属図書館が所蔵している。池田家文庫絵図展は、平成17年(2005)より岡山シティミュージアム(旧:岡山市デジタルミュージアム)にて実施してきており、展示や講演会を通じて、池田家文庫からみえる歴史を紹介してきている。なお、平成9年~同16年までは、岡山大学附属図書館の特殊資料展示室にて、「池田家文庫等貴重資料展」を実施しており、ここから数えると令和2年度絵図展は24回目の催しとなる。

令和2年度より、日本近世史を専門とする筆者が池田家文庫絵図展の監修を担当することとなったが、実施日程は令和元年11月に決定しており、令和2年10月31日(土)~11月15日(日)の16日間となった。この開催に向けて、令和2年2月頃から史料の選定を進めるとともに、関係者へ準備の要領などを確認し、展示のテーマを「岡山・大坂と海の道」と決定した(展示内容は後述)。そして、3月に展示史料の候補一覧の作成、講演会の演者の検討を行い、関係者との調整を進めた。例年であれば、春のうちに関係者と対面での打ち合わせを実施していたが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の流行もあり、5月にメール会議を実施し、会場や展示史料についての調整を進めた。筆者は初めての監修ということに加えて、メールでのやりとりということもあり、順調に準備ができているのかを不安に思いながら作業を進めていったことを記憶している。

その後、展示史料の確定のための調査を数回実施し、6月には展示史料の選定および計測が終了した。6月末には岡山シティミュージアムでの打ち合わせと展示スペースの確認を行い、その後関係者とメールをやりとりし、展示史料とレイアウト、ポスター・チラシなどによる広報、オープニングトークと講演会の実施の可否および実施形態などについて綿密に調整した。新型コロナウイルス感染症の流行を鑑みて、オープニングトークは展示室ではなく講義室での講演形式とし、人数制限、手指消毒、来場者間のスペースの確保などに留意しつつ実施することとなった。講演会についても同様な点に留意し、これらのイベントの実施の可否については感染症の状況もみつつ判断していくこととなった。結果としてイベントを実施することはできたが、連日ニュースを確認し、本当に実施できるのかと当日まで落ち着かない気分で過ごした。

池田家文庫絵図展では、来場者に図録を配布している。これは展示のねらいや関連する歴史的事象の解説、池田家文庫の絵図・史料の写真と解説などが掲載されており、例年読み応えのあるものになっていると感じる。筆者は一般向けの展示解説を執筆したことはほぼなかったため、原稿提出期限の9月まで、過去の図録も参照しつつ、試行錯誤しながら解説を執筆した。また、一部の展示史料は、史料の翻刻文もあわせて展示することにしたため、この翻刻作業も順次行った。これらの過程で、岡山藩、池田家、日本近世史一般についての自身の知識が十分ではなく、継続的に勉強していく必要があると強く感じた。

令和元年11月以降、上記のような準備を経て、令和2年10月31日に絵図展の初日を迎えることとなった。

2 絵図展の実施と内容

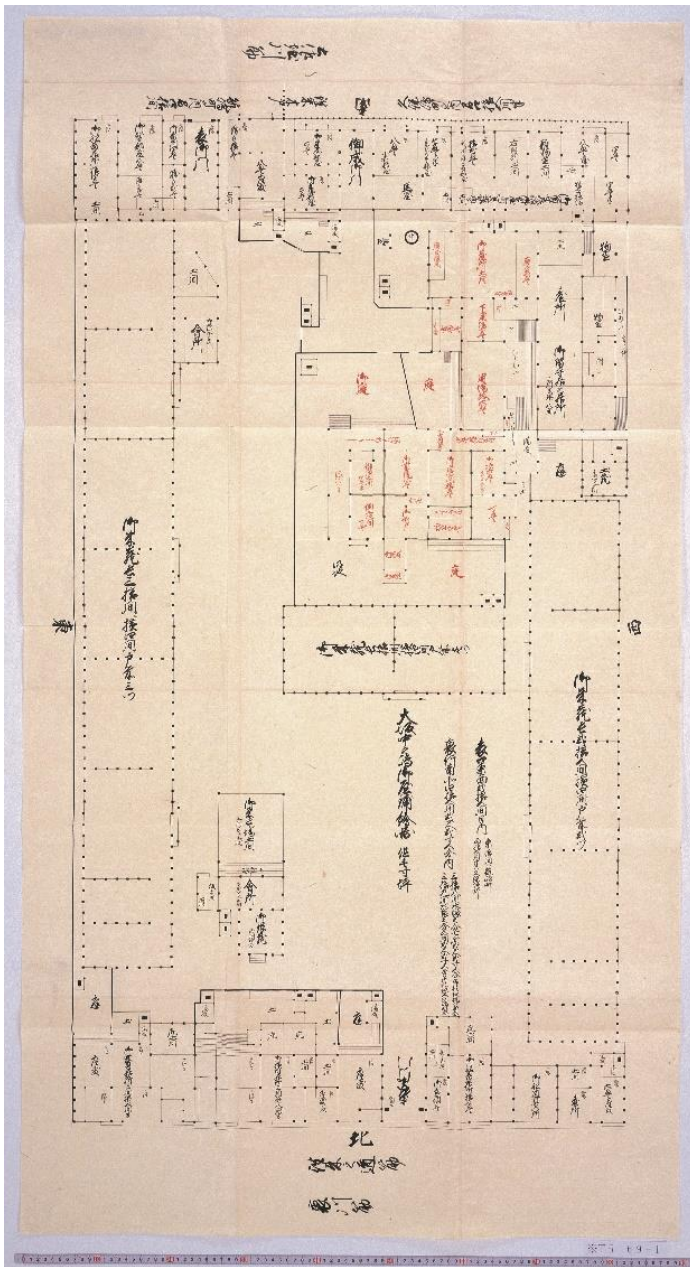
絵図展の初日には、人数制限や感染症対策を万全にしつつ、開会式とオープニングトークが行われた。オープニングトークでは、筆者が「岡山・大坂と海の道」というテーマを選んだねらいや展示史料の概要を説明した。

筆者の専門は日本近世の村・地域社会・地域経済・民衆思想などであり、西国地域（特に備中国〈現在の岡山県南西部〉）を主なフィールドとして研究を進めてきている。岡山と大坂とは陸路・海路の双方でつながっており、特に海路を通じて人や年貢米をはじめとする物資が大坂へと移送されていた。周知の通り、近世の大坂は日本列島における経済の中心地の1つであり、とりわけ西国諸国との関係は深いものがあった。岡山藩を題材として大坂と諸

国との関係を示し、外部から岡山の立ち位置を見つめ直すことで、日本近世史・岡山地域史についての理解を深めることがねらいの1つであった。また、池田家文庫絵図展では、過去に岡山・岡山藩と江戸・京都についての展示は行われていたが、三都の残る1つである大坂と岡山の関係についての展示は実施されてきておらず、このような過去の展示との連続性も意識しつつ、テーマを決定した。

絵図展では、「瀬戸内海沿岸と船」、「大坂・岡山をむすぶ海の道」、「大坂における岡山藩」、「都市大坂と岡山の関係」という4つのまとまりで、25点の絵図・文書を展示した。これに加えて、林原美術館の所蔵品である「御船屏風」、「坤輿万国全図屏風」、「平家物語絵巻 巻第八(中)「水島合戦」」の3点を展示した。

展示史料の中でも、「大坂中之嶋御本屋舗絵図」は、大坂中之島にあった岡山藩の蔵屋敷を描いたものであり、今回現物を展示した絵図の中では最大のもの（タテ167.0 cm×ヨコ90.2 cm）であった。蔵屋敷には藩の役人（留守居など）が居住し、各藩の大坂における活動の拠点となっていた。各藩の留守居同士が情報を交換し、また留守居が国元へ大坂の情報を送るなど、藩同士や藩と大坂とをつなぐ重要な役割を担っていた。そし



「大坂中之嶋御本屋舗絵図」
(池田家文庫 T5-69-1)



弘化4年(1847)「淀川筋図」
(池田家文庫T9-7)

て、幕末期の岡山藩では、毎年5万4400石の米を大坂へ海送し、これを売却していた(「大坂廻米高御届」)。また、大坂は学問の中心地の1つでもあり、岡山との学術・文化面での関係も見出すことができる。幕末期に大坂にて適塾(医学・蘭学塾)の塾頭を務めていた緒方洪庵は、備中国足守藩士であったこともあり、岡山藩主の診療を行った際の史料が池田家文庫に伝来している。そもそも、池田家文庫に大坂や大坂周辺地域の絵図が多数伝来していることは、岡山藩や池田家にとって大坂の情報を視覚的にも把握しておくことが必要とされたためであり、岡山藩および西国諸国にとっての大坂の重要性をうかがうことができよう。

11月7日(土)には、兵庫県立歴史博物館館長の藪田貫氏に、「西国の武士、大坂に出張する一蔵屋敷と大坂城加番」というタイトルでご講演いただいた。講演を拝聴する中で、大坂と諸国との船を通じた往来の濃淡、大坂における大名や武士の職務と生活などについて、改めて多くの事柄を知ることができ、非常に興味深いものであった。

また、展示期間中には、オープニングトークでの筆者の講演を展示室の大型スクリーンに投影しており、この映像を長時間見ていた来場者も目についた。

3 絵図展の反省と日本史学による社会貢献

絵図展を終えての反省点として、「来場者の目を引く展示」をより意識すべきであったと感じた。令和元年度絵図展「武家と天皇」では、起こし絵図の「大嘗祭図」や彩色の「御即位絵図」など、目をひく史料が明確で、展示の注目ポイントがわかりやすかったように思う。史料の彩色の有無、大きさ、展示レイアウトをふまえたうえでの来場者への見え方など、展示についてより工夫する余地があると感じた。筆者は主に文献史学の立場から研究を行ってきたため、文書史料に関心を払いがちであるが、視覚的にわかりやすい絵図の活用

についてより留意していきたいと思う。また、筆者はこれまで地域史・史料保全に関わる活動には参加してきたものの、博物館の展示に関わった経験がほとんどなく、一般向けの展示や書籍執筆などについてより学ぶ必要があると感じた。

展示内容に関して、池田家文庫の中で大坂に関する史料は、江戸に関する史料と比べると点数が少なく、展示史料の選定作業は難航した。これは筆者がいまだ池田家文庫の全体像や特徴的な史料について十分に知らなかったことが大きな要因であり、今後の研究や絵図展を通じて、池田家文庫そのものへの理解を深めていく必要がある。また、可能であれば絵図だけでなく池田家文庫の文書史料のデジタル公開もできれば、絵図展の準備以外にも様々な場面で活用の幅が広がると思われるが、公開のための設備や費用の問題などもあり、長期的に検討しなければならない課題であろう。

池田家文庫は、戦後の岡山大学開学にあたって、広範な方々のご尽力により、岡山大学附属図書館が所蔵することとなったものである。岡山大学には、この貴重な史料を用いて、地域と社会に対して広く貢献していく責務がある。このことを前提としつつ、大学や博物館の置かれた厳しい状況下において、持続的な史料の整理・保存・活用の体制の整備と地域・社会への貢献をバランスよく両立していくために、様々なことを見直していく必要があるとも感じる。

また、「池田家文庫絵図展」という一定の知名度を有するイベントを利用して、日本近世史のみに限定されない知見を提供することも検討されるべきかもしれない。「岡山藩」や「池田家文庫」を基軸にしつつ、より広い歴史的スパンの中で岡山の位置を再確認するような催しができないか、これは「池田家文庫絵図展」とはまた異なる位相の事柄でもあるが、岡山大学が行うさまざまな活動とのバランスを鑑みつつ、日本史学が提供できる「知」を再考してみる必要もあろう。

展示史料に関して、池田家文庫は岡山藩の藩政文書であるが、幕末や近代の史料、典籍類も豊富に含まれている。さらに、岡山大学附属図書館の所蔵史料全体に目を広げると、岡山県下各地の地方史料や個人文庫の類など、地域の歴史を多方面から描き出すことのできる史料を多く所蔵している。これらの史料の活用について、より柔軟に検討していくべきであると感じた。また、池田家に関わる美術品や調度類は林原美術館に多く所蔵されており、今後一層の連携を図る中で、紙の史料以外も用いた効果的な展示を構想していく必要がある。

池田家文庫および岡山大学附属図書館所蔵の文書類には、地域・日本・そして人類の歴史に関わる豊富な情報が秘められており、これは活用の仕方次第で多くの知見や楽しみを社会や市民に向けて発信することのできるものである。大学・史料所蔵施設・社会の三者のいずれにも利益のある史料の利用方法やその体制について、継続して考えていきたいと思う。

最後に、絵図展の準備・実施にあたっては、岡山シティミュージアム、岡山大学附属図書館、林原美術館、ご講演いただいた藪田貫氏をはじめとする関係各位にご尽力いただいた。特に令和2年度絵図展にあたっては、例年以上にご苦勞が多かったことと思う。記して心より御礼申し上げたい。

【参考文献】

今津勝紀「奇跡の池田家文庫」(『楳』65号、2017年)

「池田家文庫」(岡山大学附属図書館 HP、<http://www.lib.okayama-u.ac.jp/collections/ikeda.html>、2021年1月6日最終閲覧)

(ひがしの・まさのぶ 社会文化科学研究科 講師)

中央図書館のスペースに愛称が付与されました ～ネーミングライツの導入について～

岡山大学では令和元年度にネーミングライツ事業を開始し、契約パートナーを募集しています。この10月、中央図書館のスペースについて、株式会社岡山村田製作所とオージー技研株式会社の二社と契約を締結し、以下のとおり愛称をいただきました。契約期間は3年間で、岡山大学としては初めてのネーミングライツ・パートナーとなります。

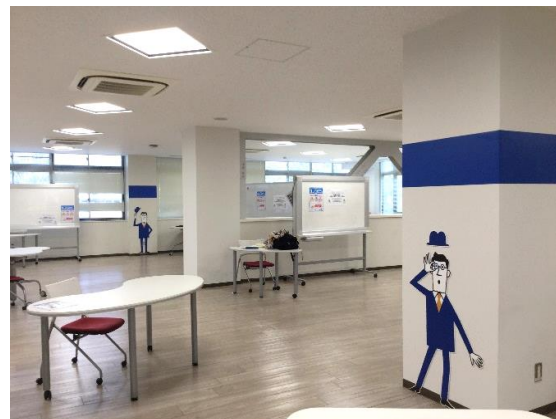
ムラタアカデミア（旧サルトフロresta）



ムラタスクエア（旧ヒヨセルーム）



OG Wellness SALON ラーニングcommons・リフレッシュスペース



チアリーディング部
(岡山村田製作所)



ネーミングライツは、愛称を付与することで施設の魅力向上を図り、民間事業者と連携する機会を拡大することを目的としており、契約に基づくネーミングライツ料は施設整備等に活用いたします。今回、2社にパートナーとなっただいたことにより、図書館を利用する皆さんが、地元岡山の企業への親しみを持つとともに、図書館のスペースへの愛着を深めてくださればと願っています。



オージーくん
(オージー技研)

マスカット

新型コロナウイルス感染症対策報告

2021年2月現在、楳71号の報告と同様の対策を継続しながら開館しています。

池田家文庫絵図展報告

2020年10月31日(土)～11月15日(日)に岡山シティミュージアムを会場に池田家文庫絵図展「岡山・大坂と海の道」を開催しました。

開会初日には開会式と企画・監修した東野将伸社会文化科学研究科講師によるオープニングトークを実施しました。オープニングトークは新型コロナウイルス感染症対策のため、事前予約制とし、展示会場での解説ではなく講義形式での開催となりました。後日、会場で動画を上映し好評でした。

また、11月7日(土)に記念講演会「西国の武士、大坂に出張する一蔵屋敷と大坂城加番」を開催、兵庫県立歴史博物館長の藪田貫氏にご講演いただき、こちらも32名の参加を得ました。全体の入場者数としては887名となりました。来年度以降の池田家文庫絵図展もどうぞよろしくお願ひします。



ブックハンティング実施報告

ブックハンティングは学生が図書館の蔵書に相応しいと思う本や、多くの学生の利用が期待できる本を選ぶイベントです。

中央図書館のブックハンティングは、例年は書店に向き実施しておりましたが、今年度はオンラインで11月に開催しました。学生7名の方に選書システムで75冊の本を選んでいただき、重複・品切の資料を除いた69冊を購入しました。

資源植物科学研究所分館のブックハンティングは、2020年12月3日(水)に、喜久屋書店倉敷店で開催しました。5名(学生3名、教員2名)の方にご参加いただき、選んでいただいた51冊の本のうち、所蔵済みの資料などを除いた43冊の本を購入しました。



中央図書館ミニ展示報告

中央図書館本館1Fロビーの展示スペースで、当館資料を紹介する「ミニ展示」を実施しています。ぜひご覧ください。2020年10月～2021年2月は以下のテーマで展示しました。

- 10月 「生協寄贈図書」
- 11月 「レポート・論文の書き方」
- 12月-1月 「知好楽セミナー関連ミニ展示
知を産み、育む——沢山美果子
『性からよむ江戸時代』を題材に」
- 2月 「ブックハンティング」



2020年10月より、感染防止対策を実施したうえでミニ展示を再開致しました。

※「白水社エクス・リブリス」「新潮クレスト・ブックス」の展示を本館 2F ムラタアカデミアで継続して実施しております。

ガイダンス・データベース講習会実施報告

○中央図書館

中央図書館では2020年11月にZoom等を使用してオンラインデータベース講習会を開催しました。開催後には岡山大学 Moodle を介して記録動画を公開し、2021年1月末までにオンタイム参加とオンデマンド配信をあわせて延べ103名の方にご参加いただきました。

データベース講習会

実施日	データベース名	参加人数
11月12日	Web of Science / EndNote	64
11月16日	ジャパンナレッジ	32
11月19日	SciFinder-n	7

○鹿田分館

鹿田分館では2020年10月にガイダンスを実施し、延べ80名の方にご参加いただきました。

ガイダンス

実施日	講習会名	参加人数
10月14日	図書館・文献検索ガイダンス (教員の依頼により授業で実施)	80

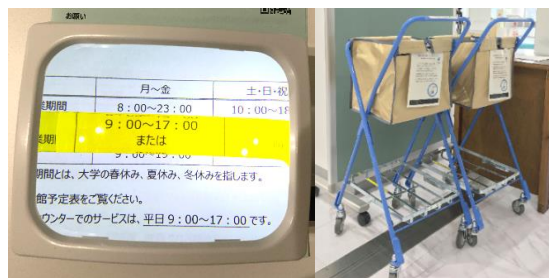
○植物研分館

植物研分館では講習会等の実施は期間中ありませんでした。

拡大鏡・ブックカートの導入

中央図書館では、図書館がより多くの方にとって利用しやすい場所になるよう、拡大鏡とブックカートを導入しました。こちらは障がい学生支援経費による購入ですが、どなたでもご利用いただけます。

ブックカートは1階参考調査カウンター前に設置しておりますので、ご自由にご利用ください。拡大鏡を利用したい時は1階貸出返却カウンターの職員までおたずねください。



教員からの寄贈図書リスト

次の方々から著書をご寄贈いただきました。ありがとうございました。

<中央図書館>

大江 洋 [大学院教育学研究科]

子どもの道徳的・法的地位と正義論：新・子どもの権利論序説——法律文化社，2020.10 (369.4/O)

沢山美果子 [客員研究員]

性からよむ江戸時代：生活の現場から——岩波書店，2020.8 (081/I)

<鹿田分館>

受入なし

岡山大学出版会からの寄贈図書リスト

受入なし

会議

◆学外

- | | | | |
|----------------------|--------------------------------------|-----------|---|
| 2020.10.26
～11.13 | 令和2年度国立大学図書館協会中国四国地区
実務者会議（メール会議） | 2020.12.4 | 令和2年度国立大学図書館協会中国四国地区
所管部課長会議（Web会議） |
| 2020.11.13 | 第56回日本医学図書館協会中国四国地区総会
（Web会議） | 2021.1.29 | 2020年度オープンアクセスリポジトリ推進協
会（JPCOAR）第13回運営委員会（Web会議） |

◆学内

- | | | | |
|------------|--|------------|----------------------|
| 2020.11.19 | 令和2年度第1回岡山大学出版会編集委員会 | 2020.12.17 | 令和2年度第2回岡山大学出版会運営委員会 |
| 2020.11.24 | 令和2年度第2回附属図書館電子ジャーナル
等経費検討委員会・電子ジャーナル等選定
ワーキンググループ合同会議 | 2021.1.22 | 令和2年度第2回附属図書館運営委員会 |

研修

- ・令和2年度国立大学法人岡山大学事務系新任職員振り
返り研修
参加者 植山 廣紀（10.9 学内 オンライン研修）
- ・令和2年度岡山大学職員英語研修（上級）
参加者 植山 廣紀
（10.12～11.19 学内 オンライン研修 計7回）
- ・第61回中国四国地区大学図書館研究集会
参加者 奥村 小百合, 尾崎 文代, 富岡 達治,
大園 隼彦, 藤原 智孝, 塩尻 章代, 加藤 伸恵,
植山 廣紀（10.16 オンライン研修）
- ・令和2年度国立大学法人岡山大学事務系管理職員研修
参加者 尾崎 文代, 富岡 達治
（11.26 学内 オンライン研修）
- ・令和2年度国立大学法人図書館協会地区助成事業
（中国四国地区）ワークショップ
参加者 犬飼 恵美子, 藤原 智孝, 藤井 香子,
羽田 まどか, 植山 廣紀（2.12 オンライン研修）

編集委員から

国内で新型コロナウイルスが確認されてから約一年が経ちますが、これまで当たり前だと思っていた価値観を改めて見直すこととなった一年でもありました。新しい生活様式の一環としてオンライン化が加速してきており、図書館でも、セミナーや講習会、ブックハンティングを初めてオンラインで実施しました。場所や時には時間も選ばず受講ができ、より気軽にご参加いただけたのではないのでしょうか。まだまだ不便な日々が続きますが、このコロナ禍で変わった良い点にも目を向けて、図書館としてより良いサービスを提供できるよう模索していきたいと思います。（N. I）

岡山大学附属図書館報「楳」 No. 72 2021年2月28日

発行人 奥村小百合 編集 広報ワーキング

岡山大学附属図書館発行 〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目1-1

ホームページ URL <http://www.lib.okayama-u.ac.jp>

